



愛隣幼稚園..... 園だより 12. 3月号

光に照らされ、光となる

子どもたちひとり一人の成長を感謝し、大きい組の仲間たちを送り出す時がきました。『ひかり組』の1年は、まだ日本中が大混乱のさ中にある時に始まりました。大きい組の名前は例年ならば3月中に決まって、1年の歩みをスタートさせるのですが、それも今年は年長になってからというイレギュラーなスタートでした。あの震災のあと、東日本に住む私たちは光を失った生活がどのようなものか、ということを知りました。実際、電気の消えた夜の街は、あまりに静かで夜はこんなに暗かったのかと驚きました。怖いとさえ思いました。気持ちも暗く沈みました。足元を照らす光がほしいと思いました。行く先を示す光がほしいと思いました。私たちがどれほど光を求めているか、ということにも気付かされました。そんな時、愛隣幼稚園に『ひかり組』が誕生しました。「ひかり」という名前を聞いた時、—その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである（ヨハネによる福音書1章9節）—という聖書の言葉を思い出しました。この聖句の中の「光」はイエス様をさしています。あのイエス様が私たちを照らす光になってくださったように、『ひかり組』にも愛隣幼稚園を照らす「ひかり」になってほしいと思いました。

今日、ひかり組のHくんが、たんぼ組の男の子のお世話をあれこれしてあげているのに出会いました。担任が「そういえばHくんもたんぼ組の頃、大きい組のお兄さんにいっぱいあそんでもらったねえ」と言うとき、Hくんはうちゅう組の2人のお兄さんの名前を挙げたそうです。自分が年少の時のことを、鮮明に覚えていることに驚かされました。たくさん遊んでもらった記憶は年少時代の子ども心にもしっかりと刻まれていたのです。「ひかりランド」（ホールの楽しいこと）で幼稚園中の子どもたちがあそんだ今日の午後、ばらやたんぼ組のたくさん子どもたちが、アルバイトとしてホールのお店屋さんなどで働いていました。そうしてそこで大きい組のやってくれたように、自分たちも仲間を楽しませ、自分も楽しんでいる姿に、その心もちを思いました。お兄さんやお姉さんたちがやっていたことを、同じようにできる嬉しさはいかばかりかと。実際、こうして楽しさを分けてもらった後の小さい組のあそびは大きく変化します。「もっとこうしたい」「あんなこともやってみたい」「楽しいこと分けてもらって嬉しかったから、私たちの楽しいことも幼稚園中のみんなに分けてあげたい」・・・『ひかり組』の放った「光」がこうして愛隣幼稚園全体を照らし包み込み、新しい光源を創りだすのです。今年生まれた光源は、来年の今頃には強く、明るく、暖かい大きな「光」になって、また幼稚園中を包みこんでいるに違いありません。

まだ凜とした寒さの残る早春の夜空を見上げると、千葉の空にもたくさんの星が輝いています。同じように輝いていますが、輝きの色も、強さも、大きさもひとつひとつみんな違っていています。違っていい、と夜空を見上げて思えます。愛隣を照らした「ひかり」たちが集立っていきます。幼稚園ではひとり一人が輝きながら、大きな「ひかり」になりましたが、一旦この「ひかり」は夜空の星たちのようにそれぞれの生活の場で輝く小さな光となって散らばります。散らばりますが、この光は輝き続けます。ひとつとして同じ輝きはありません。同じでないほうがいいかもしれません。ある者は仲間を導く大きな光になり、ある者は悲しむ仲間を包み込む優しい光になる。足元を照らす光もあるでしょう。小さく輝く光の美しさに心癒される仲間もいるでしょう。そんなあなたがたの放つ光に照らされて、新たな光源が生まれるのです。広い世界に散らばった小さな「ひかり」は大きな「ひかり」を創りだすのです。そんなあなたがたひとり一人もまた、神様の光に照らされ、包まれていることを忘れないでいてください。あなたを守り導く「光」です。